

# 稲山会 通信

## 第 11 号

2005年1月1日発行

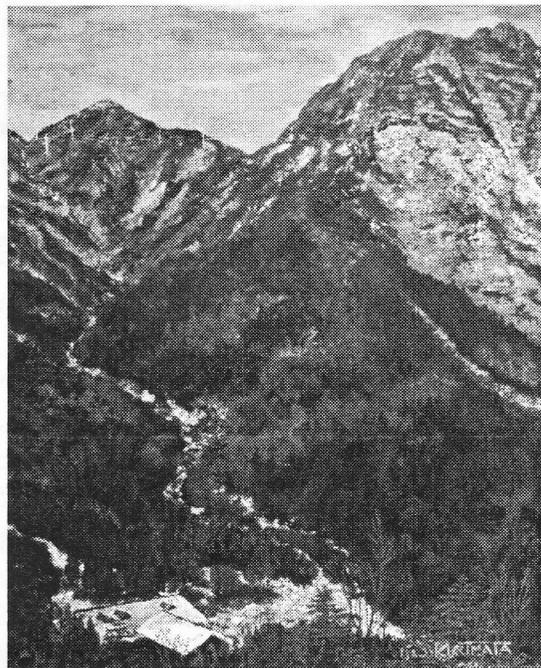
発行人：早川 正 発行所：稲門山の会事務局 TEL03-3367-3723 FAX03-3367-8150 ©稲門山の会1998

### 「阿弥陀岳初冬」

栗又 功雄 (38年卒)

右の絵は第57回示現会展(2004年4月)に出展したもので、油彩80号です。絵を描くために再び山に挑戦し、昨年(2003)の12月一人で赤岳鉱泉に入り、中山乗越から描いたものです。美濃戸から赤岳鉱泉までとはいえ、久しぶりの単独行に緊張し、丸太の橋を渡るときなどオッカナビックリでした。

今年は山靴も新調し、ヤッケなど装備もそろえ、昔の仲間との山行も8回を数えました。体力は衰えましたが、絵を描くためにもう少し頑張ります。来年の示現会には、北沢峠から仙丈に登った時の絵を出すつもりです。



### 夏山合宿の報告

2004年の夏山合宿は4パーティーに分散して、上級生主体のパーティーは長期間の縦走に耐える体力作り、新人は比較的短期間の縦走で基礎技術の習得を目指した。参加者は全員で14名で、そのうち新人は3名が参加した。

#### 1 北ア全山縦走パーティー (穂高岳～槍ヶ岳～針の木～鹿島槍～白馬～日本海) 7月30日～8月12日

L: 佐々木直之(理院2・前幹事長) SL: 伊藤穂高(理2) 塚澤幸子(理4新人・針の木岳まで)  
7月30日に岳沢から入り、奥穂、北穂、キレットの岩場を無事通過して、8月2日に槍ヶ岳から三俣蓮華まで。その後野口五郎岳から烏帽子と順調に縦走し、8月4日船窪で幕営した。5日に針ノ木岳で鹿島槍Pと会う。針の木で新人の塚澤が予定通り下山する。塚澤も穂高のキレットの通過、西鎌尾根、裏銀と1週間の縦走を良く頑張った。その後佐々木と伊藤は快調に縦走して、8月8日には五竜岳、10日に白馬を越えて朝日小屋まで頑張った。12日午後4:00に日本海に達し、2人で喜びを分かち合った。

#### 2 鹿島槍～穂高パーティー (鹿島槍ヶ岳～槍ヶ岳～穂高～岳沢) 8月3日～8月12日

L: 藤井明(社3・幹事長) SL: 野村耕平(社2) 山本達也(理院2) 森本博行(理院2)  
8月3日大糸線築場駅からスタート。5日鹿島槍を往復して、種池小屋。6日に新越山荘の途中で針ノ木から単独縦走の恩田OBと出会う。出会いは短い時間であったが、山の中で恩田OBに会えてとても嬉しかった。その日は針ノ木で全山Pとも合流した。全山Pは真っ黒に日焼けして頼もしい限りである。7日船窪、8日烏帽子、9日水晶岳の途中で鈴木明人OBとバッタリ会い、鈴木OB達と記念に集合写真を撮る。三俣山荘で幕営。10日は槍ヶ岳を目指す日で、西鎌尾根を頑張る、午前中に槍ヶ岳に着いた。11日はキレットを通り、穂高濁沢まで。北穂高から見る槍ヶ岳は格別。濁沢で穂高Pとも会う。12日奥穂高に登り、岳沢から上高地に下った。

現

役

よ

り

### 3 表銀座パーティー (燕岳～槍ヶ岳～槍沢) 8月3日～8月5日

L: 山田裕明 (商3) SL: 高石麻美 (文3) 谷山歩 (法2・新人)

8月3日6:40に中房温泉を出発し、午後4:00頃に大天井に着く。強風の中で幕営。4日も前日と同じ強風の中を東鎌尾根を縦走して、午後2:00頃に槍ヶ岳山荘に着いた。翌5日槍沢をひたすら下り、徐々にハイキング客が目立ち始めると、短いながらも縦走が終わったのだと感じた。

### 4 穂高岳パーティー (涸沢～穂高岳) 8月11日～8月14日

L: 中村達 (理3・副幹事長) SL: 田中雄也 (理3) 武田惇志 (政経4) 谷川直哉 (国際1 新人)

8月11日午後12:30頃に涸沢の天幕場に到着した。夕方、鹿島槍Pが北穂から涸沢に降りてくる。皆かなり日焼けして、再会出来て嬉しそうである。12日は北穂高岳の往復で、新人に歩き方を教えながら南稜を登る。13日奥穂高往復の予定で出発したが新人の足取りが不安なので、涸沢岳に変更して往復する。翌日屏風のコルを経由して徳沢に下山した。新人は少しずつ進歩しているが、やはり都会でのトレーニングが不足していた。リーダーの責任であるので、育成に努力したい。

## キリマンジャロ山行報告

山田裕明 (商学部3年)

9月7日、初日。標高2200mのマランゲートを出発し、2700mのマングラハットまでは青々と緑が茂っていた。マングラから3700mのホロンボハットまでは徐々に植生が変化していき、途中、日本のハイマツのようなものも見られた。このあたりの景色は日本の山道とほとんど変わらず、緩やかな傾斜を延々と歩くだけで大したことはない。3700mまで来ると低緯度の地とは言えさすがに寒々としていて、小屋ではシュラフにくるまって震えながら寝ることになった。

2日目。ホロンボを出て少しすると眼前にキリマンジャロの頂が現れた。キリマンジャロは急峻ではなく緩やかな山で、ここからはほとんど景色が変わらない殺風景な道を歩くことになった。この日の行程は4700mのキボハットまでなので楽であった。キボハットに到着すると徐々に頭痛がし始めた。頂上に向けての出発はこの日の深夜0時なので出来るだけ睡眠をとろうと試みたが高山病から来る頭痛で眠ることは出来なかった。

午前0時、頂上のウフルピークを目指しかなりの寒さの中ヘッドランプをかざしながら出発。これまでと違って傾斜が急なのでジグザグに高度を稼いでいく。ペースを落として進んでいるのだが体力が持たず何度も休憩をとった。高度が上がるにつれて高山病も進行していき頭痛に加えて吐き気も催し、朦朧とした意識の中ふらふらと歩き続けた。しかしここまで来るともうただ無心で歩き続けるだけで、いつの間にかウフルピークまで辿り着いていた。ピークでご来光を拝むべく深夜に出発しての念願の頂上であるはずだったが、体を動かしていないと寒さと頭痛に耐えられないので早々に下山してしまった。高度を下げると高山病は信じられないくらいふっと引いた。登山口に到着したときは体中の力がふっと抜けて、頂上では味わえなかった達成感と感動に満たされた。

本来4泊5日で登る予定のところを取って2泊3日に挑戦したことが高山病につながったことは間違いない。しかし、自信があったからこそその挑戦であり、実際に頂上まで到達することが出来た。今回の山行はセブン・サミットのアフリカ最高峰踏破を目指したものであり登頂に成功したがキリマンジャロは7峰の中で最も容易な山であるので、これに慢心せずに第2、3峰目に向けて気を引き締めて精進していかなければならない。

現

役

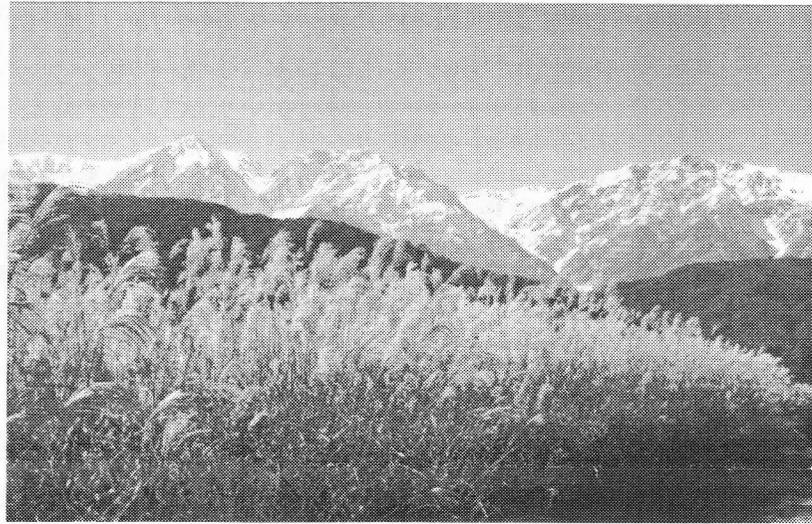
よ

り

## 落倉菜時記一秋

小久保雅代(38年卒)

9月中旬、稜線から始まった紅葉が山腹を彩る頃、田圃では稲や蕎麦の刈り入れが始まる。入れ替わるように畑では野菜が緑の葉を広げる。冬野菜は冷え込むほどにぐんぐん伸びて、霜に当たり、1~2度雪を被ると、甘味も加わりおいしさが増す。



きのこ 隣村の仲良しから ▲落倉より望む白馬三山

ナラタケ(モトハシ)がどっさり届いた。山で大きな群を見つけた時は嬉しくて、踊り上がって背負子にいっぱい詰め込んで来たと言う。

きのこ採りは難しい。ナメコ、シイタケは菌をほだ木にコマ打ちして育てているが、それ以外のきのこは頂き物を楽しむことにしている。

木の实 山栗、鬼ぐるみは数年振りに豊作。アケビ、サルナシ、ヤマブドウは今年は熊やリスの邪魔をしないよう、山深く分け入らないことにした。コナシ(ズミ)の果実酒を少々。

醤油づくり 数年前、90歳で亡くなった隣村のお爺様直伝の醤油づくり。春先、大豆、小麦から麴を作り、戸外で太陽に当て高温で熟成させる。仲間数軒で、毎年工夫を重ねて作り続けている。晩秋の一日、夫婦総出の醤油搾りは、我が家の楽しい年中行事のひとつとなっている。

庭先に、杉檜で作った搾り舟を置き、昔ながらの鉄製六斗釜を竈に据え火を焚く。ジャッキを使っての搾りは男衆の仕事である。舟から琥珀色の醤油が出てくると、思わず歓声が挙がる。それぞれに、作り手の味わい深い醤油が出来上がる。その醤油で、畑で採れたセロリ、タマネギ、トマト、人参をコトコト煮込んで、1年分のウスターソースを作る。淡白でピリリとスパイスの効いたソースは、一度味わったら堪えられない。

時雨模様の日が続き、里にも雪が舞うようになると、野沢菜、大根、白菜のお菜漬けが始まる。その間に、干し柿、リンゴ酢作りと山里の秋は忙しい。来春の醤油、味噌仕込み用の大豆の採り入れと仕分け、ナメコの選別は夜なべ仕事となる。

緑深かった周りの林もすっかり色付き、秋の陽に映えて明るくなる。庭木の雪囲いや除雪機の整備など、外回りの冬支度に追われる日々。もう何度も雪の来た山嶺。間もなく冬ごもりの季節を迎える。

2004年11月1日 記。白馬村落倉にて。

※編集部注 1993年12月より夫君一郎氏と長野県白馬村在住。写真も筆者。

## ジョン・ミュアー・トレイル JOHN MUIR TRAIL YOSEMITE

## Part 1 : サウスバウンド・トレッキング

吉田稔 (38年卒)

ジョン・ミュアー・トレイルを歩いてみたい、と考えたのは、大分以前のことになる。いざ出かけるとなると、それなりの日数を要するものであるし、なかなかタイミングが合わなかった。しかし、そんなことを言っていると、体力的にも目標は遙か彼方に飛び去ってしまう。そんな思いで2004年の8月と決めたのは、ほぼ1年前であった。1年後輩の真下健弥君と計画を練り、トレーニングを重ねた。

ジョン・ミュアーとはダンバー生まれ(1838年4月21日)のスコットランド人の名である。1849年家族とともにウィスコンシン州に入植。61年ウィスコンシン大学入学。64年退学。放浪の旅に出る。68年、初めてヨセミテへ。氷河や植物の研究を行い、森を守るための保護活動を開始。89年、ヨセミテ国立公園の構想を練り、翌年創設。92年、シエラ・クラブ設立、初代会長。1901年、セオドア・ルーズベルトがミュアーを訪ね、ヨセミテでキャンプをする。国立記念物制度成立のきっかけとなった。1914年12月24日没。76才。

シエラ・クラブは、ジョン・ミュアー等によって1892年、サンフランシスコに設立された山岳団体であり、自然保護団体である。自然保護を展開した世界最初の本格的な団体といわれ、今日でもその影響力は大きく、世界中の自然保護、環境保護の活動に大きな役割を担っている。

シエラネヴァダは、ご存知の通りカリフォルニア東部にある山脈である。スペイン語で「雪の山脈」を意味する。アラスカを除くアメリカ合衆国の最高峰はマウント・ホイットニー(4418m)であるが、カリフォルニア州南東部に位置し、セコイア国立公園の東境にある。1864年地質学者J.D.ホイットニーが初めて探検、1873年に初登頂を果たした。ジョン・ミュアー・トレイルは、このMt.ホイットニーからヨセミテ渓谷まで340kmにわたって続いている。

8月12日(木) 成田発 17:55UAでサンフランシスコへ、9時間。11時過ぎ着。高温、高湿度の異常な日本の夏と異なり快適だ。レンタカーを借りるのに長い列でうんざり。装備の一部を補充のため“REI”に寄る。入口のドアノブがピッケルだなんてニクイ。これからしばらくは美味しいもの食べられないからと、2年ぶりに会った友人と3人、高級料理屋に入る。分厚いピンクのローストビーフとカリフォルニア・ワインだ。

8月13日(金) AMTRACKの予約をとりがてら、ベイブリッジを渡りジョン・ミュアー・ミュージアムを訪ねた。1914年にその生涯を終えた家と果樹園がそのままミュージアムとして残されている。夕方になると冷え込む。ナイキ・タウンで防寒下着を買う。また荷物がふえた。

8月14日(土) 7:05バスでベイブリッジを渡り対岸のエメリーヴィル駅へ。Marced駅からバスで2時間、いよいよヨセミテ渓谷に入る。40数年ぶりのヨセミテに1時すぎ着。事務所に寄り、明日の入山許可をもらう要領を訊く。日本から6月にFAXで申し込んだら、抽選に外れたと丁寧な手紙を頂いていたからだ。明日は7時頃からラインができるが、十分余裕があるから安心しろとのこと。シャトルバスでバックパッカー専用のノースキャンプに入る。広いキャンプ場の中は大きなトレーラーハウスで満杯、day useの車の列が溢れている。バックパッカーは1%にも満たないとか。こんな人混みの中なのに熊対策で食料品はフードキャニスターに入れ、テントから20~30m離しておくか、備え付けのベアーボックスに収納するよう義務づけられている。トイレは1戸建てで男女別棟。きれいに使っている。人糞の臭いなどほとんどない。シャトルバスは、夜10時まで渓谷のキャンプ村を回っている。周囲の岩峰を見ていると首が痛くなる。今夜からテント生活。まだなかなか眠れない。

8月16日(月) 7:15いよいよテント場(1250m)を出発。Tシャツにショートパンツ、ザックとステッキ。日焼け止めを剥き出しの部分にたっぷり塗りこみ、サウス・バウンドの出発点ハッピーアイルに向かう。8:15川沿いの山道に入る。ヴァーナル滝の立派な橋を渡り、いきなり対岸のジグザグ(switch back)道を登る。軽装の人達がのろのろ歩きの我々を追い越して行く。貸し馬でのぼる輩もいる。

「山路来て馬糞の後を追いかけり」

11:00ネヴァダ・フォール上部(1800m)。北側にハーフトームがそそり立つ。落差約500m。12:30過ぎ、リトル・ヨセミテ、本日のキャンプ地着。二階建てのトイレがある。用を足すのは二階だ。二人の管理人が1階のタンクに白い粉を撒いている。臭い消しだろう。レンジャー・ステーションに行き挨拶をし、許可書を見せてキャンプの指示をうける。初日でもあるが、ちょっと物足りない行動だ。明日はそうはいかない。

8月17日(火) 8:00リトル・ヨセミテからサンライズ・キャンプ、16:10着。我々の鮮やかなグリーンテントの隣に、なんと同じICI製のテント。足立区五反野の坂田明彦さん、単独行。我々が目指すレッド・メドウからの逆コースである。ナヴィをはじめ最新の装備を背負い28kgとか。遅いものだ。情報交換をし、久しぶりにバーボンをご馳走になる。彼の詳しい情報に感謝。

今日は途中でルートの間違えロスタイム1時間25分。サンライズ・ピークへの最後の急登はきつかった。19:30早々に寝る態勢も、眠れない。横になっていれば疲労もとれる。

**8月18日(水)** 朝日が見事だ。さすがサンライズ・キャンプ。7:30坂田氏は何も食わずに出発。朝飯の用意に時間がかかるので、1ピッチを終えて食事とのこと。もうヨセミテに降りるからと、余分なチョコビスケットとチーズを頂く。わしらは朝飯を食べ、きれいなトイレでおつとめだ。途中でキジ場探しでは、熊もいるのに——。7:30出発。9:50キャセドラル・ピークと湖が見渡せる峠2890mで休む。下から幾つかの軽装のグループが登って来る。湖への日帰りコースだろう。人種はさまざま。家族連れの夏休みか。15:00トゥオルミー・メドウのバックパッカーズ・キャンプ。先乗りのキャンパーたちから声をかけられる。大柄でヒゲ面の日本人、山本康人氏が話しかけてくる。John Muir Trailに魅せられて4度めの単独行、足にマメをつくり痛むので、今回はこれで下山とか。深大寺小の先生で3週間の休みをもらってとのこと。日本での山の経験はほとんどない、という。

**8月19日(木)** 予備日。11:00山本氏も合流して、北側のLembert Domeに出かける。20分ぐらいで簡単に登れる。連日好天。眺望は約束済み。南西にキャセドラル・ピーク、真南にシエラ最高峰Mt.Lyell(3980m)、足元を覆う氷河が切り立っている。明日はあの下でキャンプだ。トイレハウスで洗濯。ロッジでランチと一週間ぶりのシャワー。これまで石礫は使えない川や湖の水だったから、爽快。坂田氏も山本氏も英語は話せないと言っていたが、頼もしいものだ。明日から後半戦。

「幾山河想い巡りてまどろみぬ」

**8月20日(金)** トゥオルミー・メドウ(2600m) —アッパーライエル(2900m)。7:40ライエル渓谷を左手に川の音とともに進む。2km歩いた辺りでレンジャーと会う。行方不明者を探している、という。54才女性、単独行。頼んだ食料品をピックアップしていないので判明、出勤。この先で2人のレンジャーにまた訊かれる。ルート間違え、人災、熊災、転落? 11:15Kunaクリークからジグザグ登り。雷が近づき電が降る。2800m、雷が横手から轟く。雨・電は強くなく、雨具は着けず。2900m、アッパーライエル。ここならもう熊もいないだろう。14:14、池のほとり3045mにテントを張る。Mt.ライエルと氷河がけぼる。それでも熊が気にかかる。他に2パーティー5人。

「暮れなずむ目を奪わんと嶺の雪」

**8月21日(土)** アッパーライエルードノヒューパス—サウザンド・アイランド・レイク。8:08キャンプサイト3045m出発。8:52ドノヒュー・パス3350m。これを越えると、ヨセミテ国立公園からアンセル・アダムスwildernessに入る。11:10、3025mまで降りる。一人旅の男に会う。峠のこちらでは、昨日は雪が降ったと言う。南下する右手にMt.Ritterの針峰が黒々と見える。男女2人のパーティーも多い。はたしてどんな関係? 14:15サウザンド・アイランド・レイクのキャンプサイト2965m着。氷河と鋭峰、湖と島々。さすが噂の絶景。ボーイスカウトの一团もいる。

**8月22日(日)** サウザンド・アイランド・レイク—グラデイス・レイク。7:30早い雲の流れを見ながら出発。湖の北端で2回目のミス。分岐に戻る。4265kmの超ロングトレイル、カリフォルニア州のメキシコ国境からワシントン州カナダ国境までの究極のトレイル、パシフィック・クレスト・トレイルに入りこんだのだ。ロスタイム1時間半。シャドー・レイク、ロザリー・レイクを経て、14:50グラデイス・レイク着。トレイル脇に設営。本当はトレイルから200m離れてテントを張らなくてはいけない、というルールがある。20mばかり上にテント場があったので失礼した。熊の生活圏を脅かしているようで不安だ。熊対策のfood-canisterをさらに離しておく。熊の観察も少しはしてみたいとも思う。

**8月23日(月)** グラデイス・レイク—レッド・メドウ—マンモス・レイク。霧が湖を覆う。峰の上の雲は流れ、飛ぶように早い。天気が不安定なのだ。ここは2925m。幸か不幸か熊も現れなかった。樹林帯をジョンストン・レイク2450m、ミナレート・レイクへ下る。人里が近い。軽装のグループやホースライダーが登って来る。12:15、レッド・メドウ・ストア。シャトルバス・ストップだ。約100kmの第1回ジョン・ミュアー・トレイル終了。残り約250kmは来年。

**8月25日(水)** ローンパイン町からタクシーでホイットニー・ポータルへ。予備日が余ったので、ローンパインのレンジャーから、急遽Mt.ホイットニーの登山許可をもらったのだ。1日60名限定。空気があったのか? ポータルでキャンプ。

**8月26日(木)** 午前2:00、真っ暗な中に飛び出す。星が一杯だ。寒くはない。Mt.ホイットニーを右に見て高度をかせぐ。6:20、3625m着。9:50、ホイットニー4418mに登頂。西側からの強風と寒気に耐えられず、早々下山の途に。15:50テント着。往復36km、14時間の行動だった。途中のアウトポスト・キャンプで14:25、長身、カモシカのような女性に追いぬかれた。訊けば我々と同じルート。4:30に出たと言うから、2時間半差をつけられた。黒いショートパンツに赤いランニング、サングラス、サブザック、2本のストック。ほんま、様になっている。そして何よりも目立つのは、ボクと比べものにならない長い脚だった。

(メンバー:吉田稔・真下健弥)

## 雨と霧の白馬岳・大雪渓

白倉俊夫（38年卒）

メンバー：栗又功雄、松村啓之亮、吉田稔、平賀公示

前回金峰・瑞牆に行った4人が、その際にできた計画、秋の白馬三山を巡ろう、という懐かしい山行に出かけた。いま、中高年のグループは、大雪渓から三山縦走でも一般的に山中二泊が多く、山頂小屋宿泊プラス鍮温泉泊でゆっくり歩くようだ。7年のマニラ生活から帰り、久しぶりに金峰などに登った松村は、学生時代に戻ったがごとくエンジン全開であるが、体力もさることながら、肝心の勘がまだまだ、と本人が自覚している。しかし、計画は奈川村にある私の小さな家に一泊して、白馬大池から入りここで泊、山中はテッペンと計二泊で小日向の科尔經由猿倉下山というものであった。

## 10月2日（土）

安曇野で買い物をすませ、上高地線を奈川渡のトンネルを出て左折、野麦峠道路を私の山の家まで1時間弱。村営観光館で採りたての松茸と野菜を仕入れて、今夜の網焼きの材料が整う。明日の天気が気にかかる。台風が来ているからだ。松村は前回で懲りたかアルコールは控えめ。今回初参加の吉田の友人平賀は、包丁さばきも鮮やかに、料理を調べていく。私は火おこし、後片付けの吉田は、とりあえず今は用なし、ただひたすら飲んで食べるだけ。気象部だったお天気係栗又は、明日長野駅でピックアップするので、天気の行方が読めない。2、3日の悪天は皆承知しているが、荒れ方が問題だ。夜半の豪雨は、部屋中に轟くいびきをはるかに凌ぐ。

## 10月3日（日）

長野駅で栗又を乗せてオリンピック道路を雨と霧で霞む梅池へ。早川先輩にお手配頂いた、稲門山の会の名簿に広告がある八方のバイサーホフ八平で馬場支配人のご好意により、車を預かってもらい、なおかつ梅池ロープウェイまで送ってもらう。乗り場では終点の梅池ヒュッテまでの優待券まで頂く。早川さんの顔の広さというか、普段からのこの分野での付き合いの深さに感嘆。感謝、感謝。

11:30 昼飯を済ませていよいよ梅池ヒュッテをスタート。濡れて滑りやすいゴロタ道をジグザグに登る。つかの間左手に五龍が雲の上に顔を見せる。

12:50 天狗原。何組かの下りのパーティーに会うが、雨に降られて景色も楽しめないとなると、何のために歩き続けるのか馬鹿らしくなるのも無理はない。先へ進むのは我々だけか。

14:20 白馬乗鞍岳ケルン—2,436m 下りはじめて40分くらいで、唐突に白馬大池湖畔が現れる。大石小石の濡れた足場にはほとんど気疲れさせられる。男女パーティーの女性が動けないようだ。ザックを下ろして屈伸運動を薦める。吉田がどうだ、と声をかけたら、大丈夫との返事。小屋も近いから心配ないか。

15:10 白馬大池山荘着。紹介者の名前を告げたら、また即ビールの差し入れと一泊二食付特別料金の提供を受ける。なんと、なんと、これで天気さえ好ければ大名旅行、“稲門山の会御一行様歓迎”みたいなもんだ。

あまり疲れていないせいか、寝つきが悪い。9時の消灯直後、どこかの部屋からの酔ったダミ声が目目を妨げる。

## 10月4日（月）

天気が好くなる見込みはまったく無く、2、3日さらに荒れるとの予報。白馬一杓子—鍮—鍮温泉—猿倉のルートは諦めて、大雪渓を下るルートに変更で意見の一致をみた。

6:35 白馬大池山荘発。気温はさほど低くなく、見通しも悪くない。昨日の4、5時間のトレーニングが効いたせいか、皆快調。天気の回復も、一時的なものだろうが、気分を軽くしているようで、かつて歩いた山道を思い出している。

8:40 小蓮華岳

O

B

よ

り



## 早稲田大学山の会創立 50 周年記念について

間もなく、当山の会はめでたく創立50周年を迎えます。稲門山の会役員会では、50周年記念特別委員会を発足させ、会員各位とともに盛大に祝おうと企画しております。会員の皆さんの心あるご意見を承りたく存じます。早稲田大学山の会、稲門山の会にとりまして、意義のある、心に残る、そして将来に向かい大いなる発展をするための新たな礎が築かれることを念じております。

50周年記念特別委員会（市村栄一、恩田和夫、松村啓之亮、井村英明、斉藤雄二、新井昭夫）

検討中の計画 1) 記念パーティー 2) 記念山行 3) 記念誌発行 4) 記念品製作・販売 など

## ・会計報告（2004年1月～2004年12月）

摘要	収入	支出	残高
<b>(収入)</b>			
繰越金（預金・現金の合計）			1,047,439
年会費納入	1,212,000		
新年会費	306,000		
利息	40		
Tシャツ（3枚）	4,500		
広告代（新名簿）	170,000		
寄付金（故中村郷土御家族より）	50,000		
<b>(支出)</b>			
新年会支払い		330,000	
インターネット基本料		15,756	
都岳連加盟費		30,000	
役員会席料（全3回）		31,620	
案内状・稲山会通信等作成及び発送支払い		200,000	
振り込み代及び雑費		2,395	
合計	1,742,540	609,771	2,180,208
中越地震義援金未送金分			30,000
			残高 2,210,208
遭難対策費（2004年12月現在）			2,084,203
預金残高			
郵便局（2004年12/30）	1,884,500		
みずほ銀行（2004年12/30）	325,708		
郵便局定期（遭難対策基金）	1,000,000		
郵便局定期（遭難対策基金）	1,000,000		
新光証券太陽MMF	84,203		

平成 16 年 12 月 30 日 以上ご報告申し上げます 会計 関根聰一郎

## ■計報■

昨年から今年にかけて、次の4名のOBが亡くなりました。

16年3月磯貝義朗さん 16年10月豊田次男さん 16年11月水村靖さん 17年1月早川正さん  
心からご冥福をお祈り致します。

## 編集後記

1月8日、早川正OBが脳梗塞のため急逝されました。

早川OBは、抜群の行動力を生かし、稲門山の会幹事として会の活動を支え続けてこられました。また、今回の稲山会通信の編集を担当し、年末まで精力的に作業を行っておられましたが、この通信の発行が最後の仕事となってしまいました。

早川さん。ありがとうございます。お疲れさま。こよなく愛した山々に抱かれて、どうか安らかに  
お眠り下さい。 稲門山の会役員会一同